

石器研究の現在

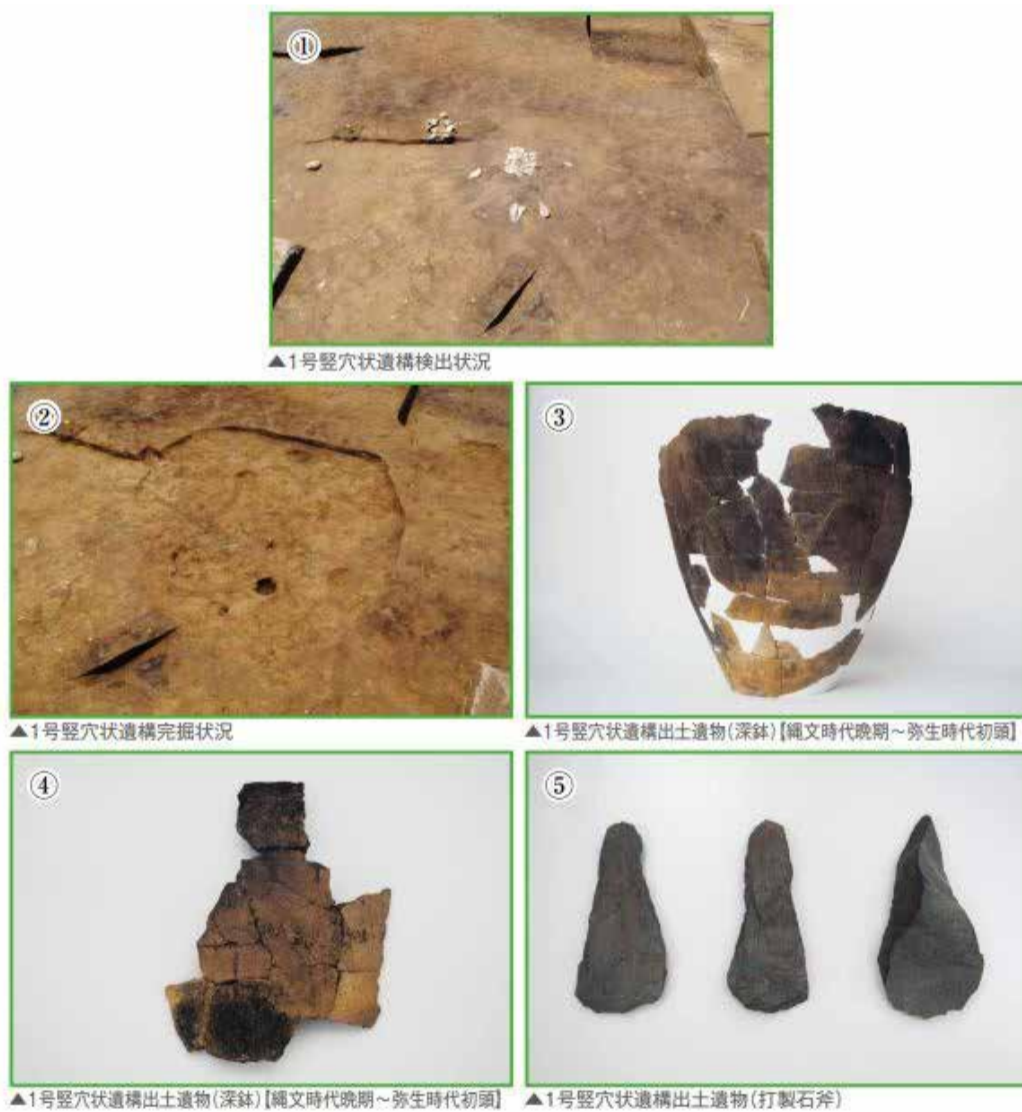
先史時代の人類が使用した道具で、残存しやすい石器については、特に旧石器時代はその研究が進んでいる。一方、約1万数千年前からの縄文時代では石器の研究は停滞し土器編年の研究が進められてきた。

大工原豊氏ら編『縄文石器提要』（ニューサイエンス社、2020年）が刊行され、縄文時代の石器の本格的な概説書として高い評価を得ている。石鏃（せきぞく、やじり）などは理解しやすいが、自然石をそのまま利用したようなものは研究が難しい。

たとえば堅果類加工のために使用した石皿や凹（くぼみ）石の使用痕（敲打痕・摩耗痕）などの観察から、堅果類を敲く時期、磨り潰す時期などを読み取り、その石のライフヒストリーを明らかにしている。使用痕を観察し、その用途を推察し、出土した時期の遺構との年代特定を経て、道具の系譜（変遷）を明らかにした。磨石（すりいし）、凹石、石皿、敲石、砥石などである。（101ページ）。

若い研究者によって、大学・大学院で独創的な研究も多く行われてきている。たとえば板垣優河氏は「石器使用痕からみた打製石斧の機能—縄文時代生業の復元に向けて—」（『古代文化』69号、2017年）で土掘り具である打製石斧を使用痕の観察から鍬（くわ）と鋤（すき）に分けた。そしてそれらが掘る目的とする植物を推定した。その後、打製石斧、磨石・石皿類の遺跡ごとの分析をした「新潟県糸魚川流域における縄文時代の植物食生活」（『新潟考古』第37号、2020年）。そうした論考の末に、「長者ヶ原遺跡のような石斧等の生産・流通の一大拠点をなした集落でも、製品と引き換えに他集落からの食料供給に強く依存するような経済的基盤はなかったと思われる。石斧等の大量生産は、あくまでも自給自足的な植物食生活を土台として、成り立っていた」「土器文化圏を共有する人々が、その経済的基盤を共有していた可能性がある」。

こうした研究の進展で奥会津地域の発掘調査等で出土した遺物を見直してみると、まず只見町小林の縄文前期から弥生時代の『七十苺遺跡』（2010、2012年）の打製石斧の多さに気がつく。



これは同町教育委員会の渡部賢史（さとし）氏が調査をし報告書をまとめており、只見町ウェブサイトでもPDFで公開されている。遺跡の主体部はまだ残されており、河川改修工事のための河川に近い側のみの発掘であった。打製石斧の未製品が多いのが特徴で、製造集落であったと推察できる。河川に近く、石材資源の豊富な伊南川の特徴である。弥生時代（2500年前）のモミの痕がついた土器も昭和40年代に確認され、奥会津での稲作栽培の古い事例が推察されている。

この小林地区は、伊南川右岸で、そこに布沢川が合流する場所になっており、古い時代からの回廊（街道）が推定されている。昭和村野尻に抜ける吉尾（よしゅう）峠、そこから三島町大谷をつなぐ美女峠、そして会津柳津、あるいは会津盆地をつなぐ。

今回、奥会津の縄文展の出土遺物の再調査で昭和村大芦の大向遺跡の土器が弥生時代の川原町口式とはじめて確認され、小林の七十苺遺跡と同時期であることなどわかってきた。